

皆野・長瀨ロータリークラブ

週報

◇例会日 第1・第2木曜日 12:30~13:30 第3・第4木曜日のいずれか 18:30~19:30
◇例会場 長瀨レクリエーションホテル 養浩亭
◇事務所 〒369-1305 秩父郡長瀨町長瀨1446 養浩亭内
Tel:0494-66-4134 / Fax:0494-66-4134 e-mail:minanaga@chichibu.ne.jp



IMAGINE ROTARY

イマジン
ロータリー

第1613回例会 令和5年3月30日(木)

【会長の時間】

畝 徳治

皆さん、こんばんは。先月は私が入院する事になり、皆さんにもご迷惑をお掛け致しました。今年度夜間例会の時には謡曲に関するお話をさせて頂いています。今日も謡曲に絡んだ、謡曲の話そのものではなく、現在に通じるような話をさせて頂きます。



謡で全国誰とでも話せますという段落です。どういう事かと言うと、抜粋は安田さんの書いた本ですが、前置きとして小学生頃、国語の授業で方言と標準語の学習をしました。方言の例として大阪弁とか薩摩弁とか京都弁とか。そして全国誰とでも通じる標準語の必要性も国語の授業でやりました。当時は標準語がどのようにして出来たのかを質問しました。東京弁が元なのですかと話したら、先生は「東京弁ではない」と答えてくれましたが、それ以上の説明はありませんでした。東京弁と言えば、江戸弁ですが、それではないと。大人になってから謡曲を学ぶことで、この辺のヒントが見つかりました。以下は安田登さんの本から抜粋です。

つい最近まで、大工さんや魚屋さんだけでなく、結婚式で「高砂や～」とやっているお父さんも多くいました。このように謡を謡う風習は江戸時代からのものです。さまざまな人がそれぞれの場で謡っていたのです。(プロでない人でも大勢の人が謡っていたという事です。)

ひと昔前までは結婚式だけでなく、成人式や還暦のお祝いなど、人生の節目のさまざまな儀式が謡で進行されていました。謡が堪能で、儀式の作法や次第にも精通していた「差配人」という人が、その儀式の進行の差配もしていた。このような形の儀式は、最近まで日本各地で見られました。(ここまでは現在に近いところです。)

江戸時代には謡には別の効用もあったといわれています。謡の詞の部分の文体は「候文」と言います。「～にて候」と文末につけるものです。方言が各地にしっかりとあり、口語では互に通じなかった江戸時代には、謡の文体である候文が武士間の公用語として使われていたそうです。たとえば、津軽弁と薩摩弁はそのまま話したら今でも通じないかもしれません。そんな時に武士は、候文でやりとりしていたのです。(各

時だけではなく、話す時にも何とか候です。)江戸城でみんな集まった時に喋るのが、標準語である謡の詞でした。歴史を継いで、明治になってからも地位のある人たち同士の手紙の文体として使われ続けており、漱石の手紙にも「候文」が散見されます。能という芸能には武士達の心をまとめるマネジメントに必要な要素がいくつもあると同時に、実用的な標準語としての機能もありました。

私が付け足すと、江戸の武士階級の言葉が元になって、現在の標準語が出来たのだという事で、私自身はそう思っています。現在の標準語も江戸時代までたどると、能の言葉が元になっているんだという詳細ではないかと思えます。

【親睦挨拶】

熊野の続きですが、今日紹介する所は、今が桜の満開ですが、熊野も春の曲になっていて、この部分が今の時期にぴったりだと思います。

謡曲「熊野」

- シ テ 「名も清き。水のまにまにとめ来れば
地 「川は音羽の。やまざくら
- シ テ 「あづま路とても東山せめて。其方の懐かしや
- サシ地 「春前に雨有って花の開くること早し。
秋後に霜無うして落葉遅し。山外に山有って山尽きず。路中に路多うして路窮り無し
- シ テ 「山青く山白くして雲来去す
地 「人楽み人愁ふ。これみな世上の有様なり
- 下 歌 「誰か言ひし春の色。げに長閑なるひがしやま
- 上 歌 「四条五条のはしのうへ。四条五条の橋の上。老若男女貴賤都鄙。色めく花衣袖を連ねてゆくすえの。雲かと見えて八重一重。咲く九重の花盛名に負ふ春の、景色かな・名におふ春のけしきかな

【幹事報告】

山田 利明

1. 地区事務所より月信
2. 米山梅吉記念館より館報及び賛助会入会のお祝い
3. 埼玉県緑化推進委員会より緑の募金運動実施について



3月25日の土曜日にPETSが開催されました。今年は地区幹事が本気です。久しぶりに本来のPETSの内容だったと思います。第4グループのガバナー補佐は秩父ロータリークラブの原島さんです。

出席率 100%

